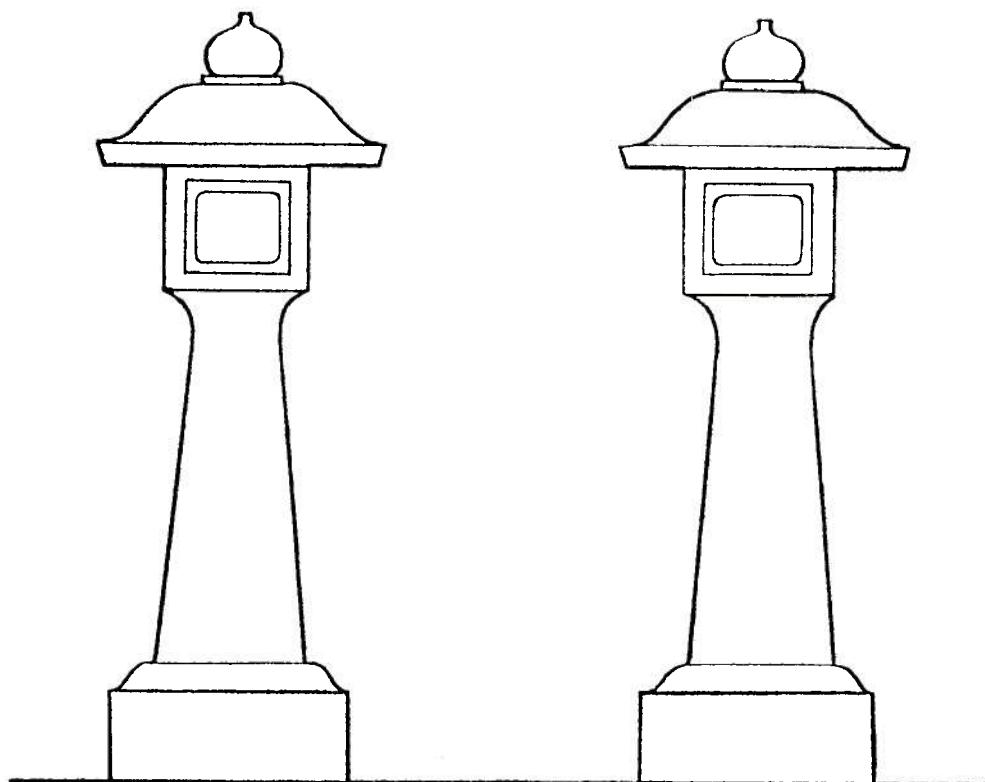


丸形墓前灯籠寸法表

	玉付笠		火袋付柱		地輪	
	径	高	径	高	径	高
3 尺	1.20	0.60	0.60	2.10	0.95	0.50
3.5 尺	1.35	0.65	0.70	2.40	1.10	0.55
4.0 尺	1.60	0.75	0.80	2.75	1.30	0.60
4.5 尺	1.80	0.85	0.90	3.10	1.40	0.70
5.0 尺	2.00	1.00	1.00	3.50	1.60	0.80

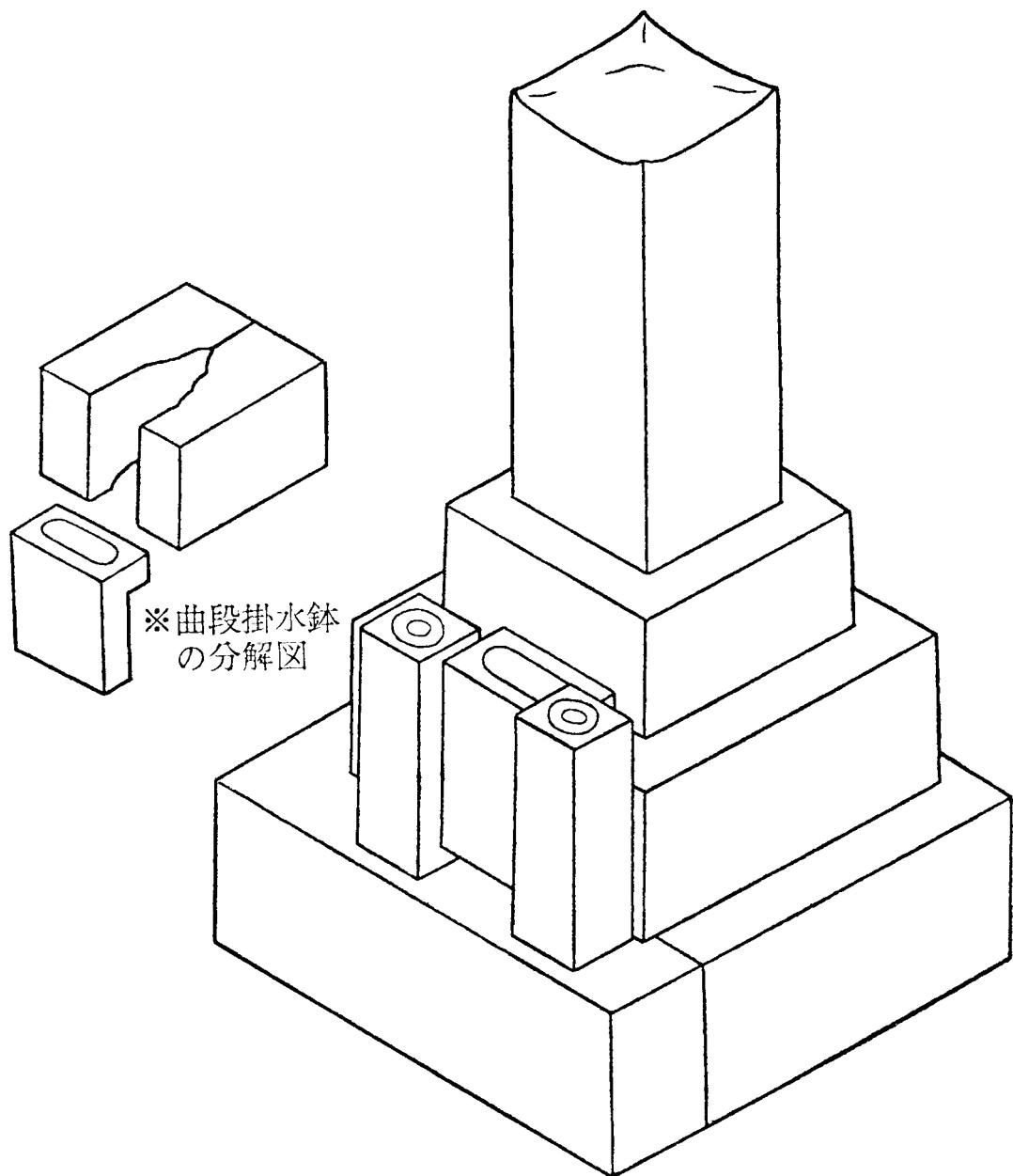
笠		柱		地	
径	高	径	高	径	高
40%	径の5割	20%	径の3倍	30%	径の5割

※ 上記比率は出来上り総丈から出す



石碑

石碑については、地方地方において、それぞれの特調ある形が出来てそれがいつしか、その地方の形となつているもので、それを収録することは労多々くして巧果少しの感があるので省略して、現在岡崎産地として全国に共通性のあるものを参考例とした、特に近時横形式の墓石が勃興されたが、これとて製作者の嗜考が多くにあるので一、二に止めておいて他は読者の判断によつて補つて頂き度念願するものである。

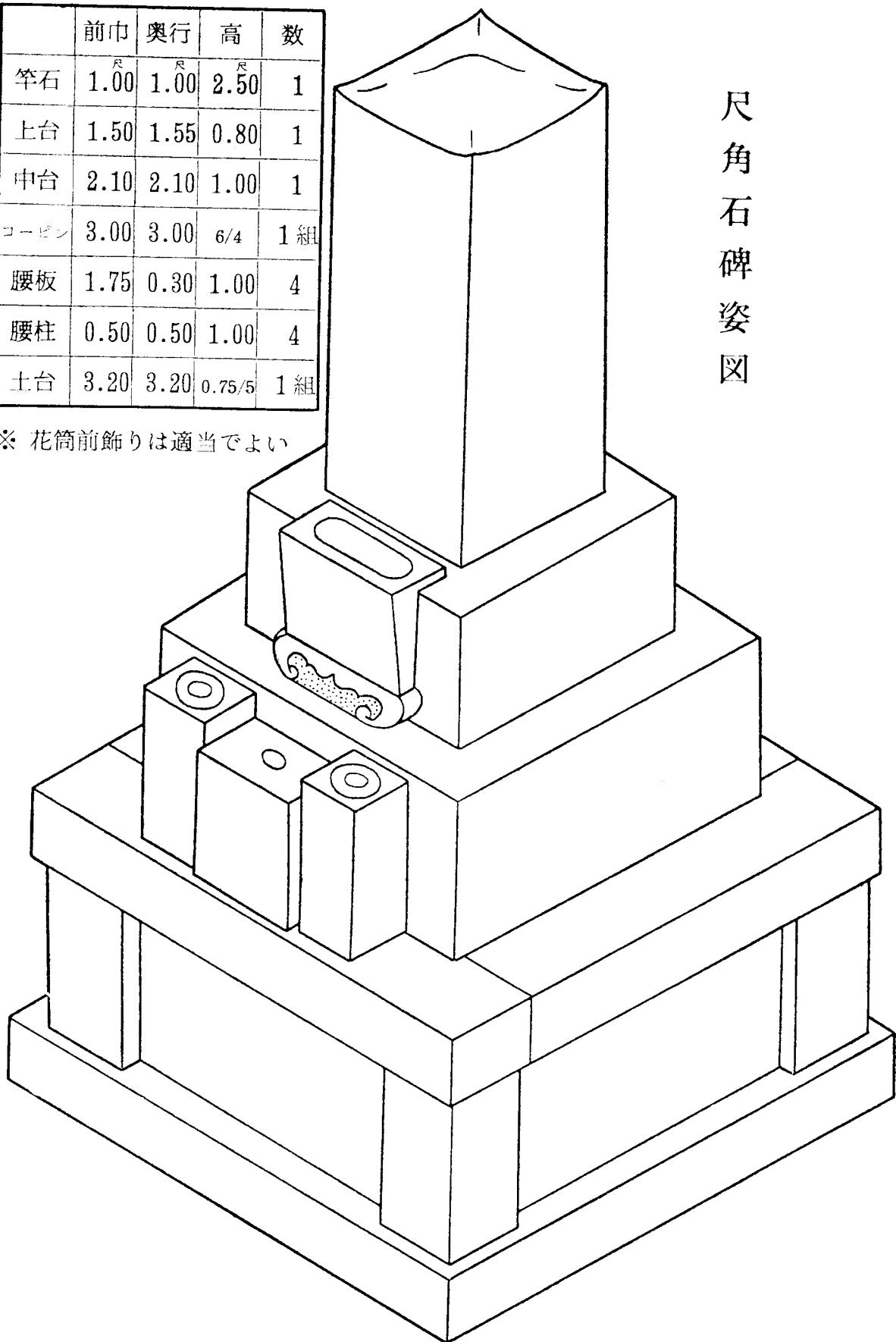


※ 山上に運搬の困難な場合上記の如く中台を二ヶに組合せ作りにして水鉢掛け込み口を骨入れに利用する。

尺角石碑姿図

	前巾	奥行	高	数
竿石	1.00	1.00	2.50	1
上台	1.50	1.55	0.80	1
中台	2.10	2.10	1.00	1
コーピン	3.00	3.00	6/4	1組
腰板	1.75	0.30	1.00	4
腰柱	0.50	0.50	1.00	4
土台	3.20	3.20	0.75/5	1組

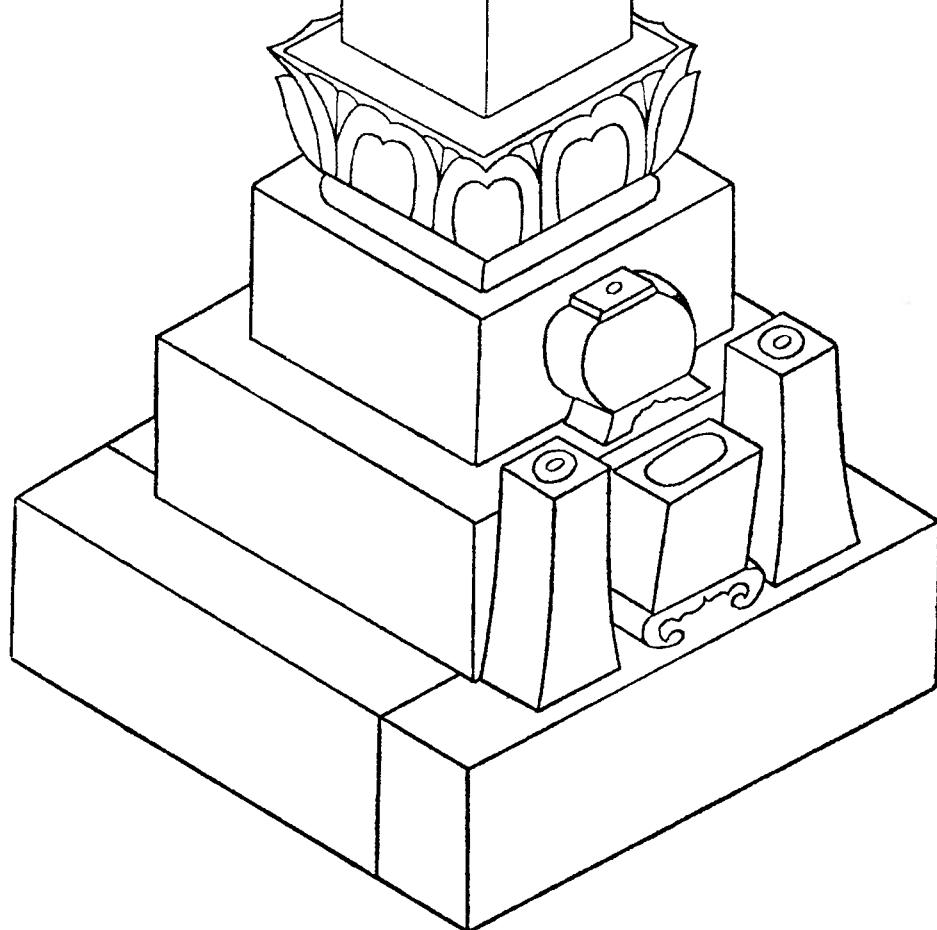
※ 花筒前飾りは適當でよい

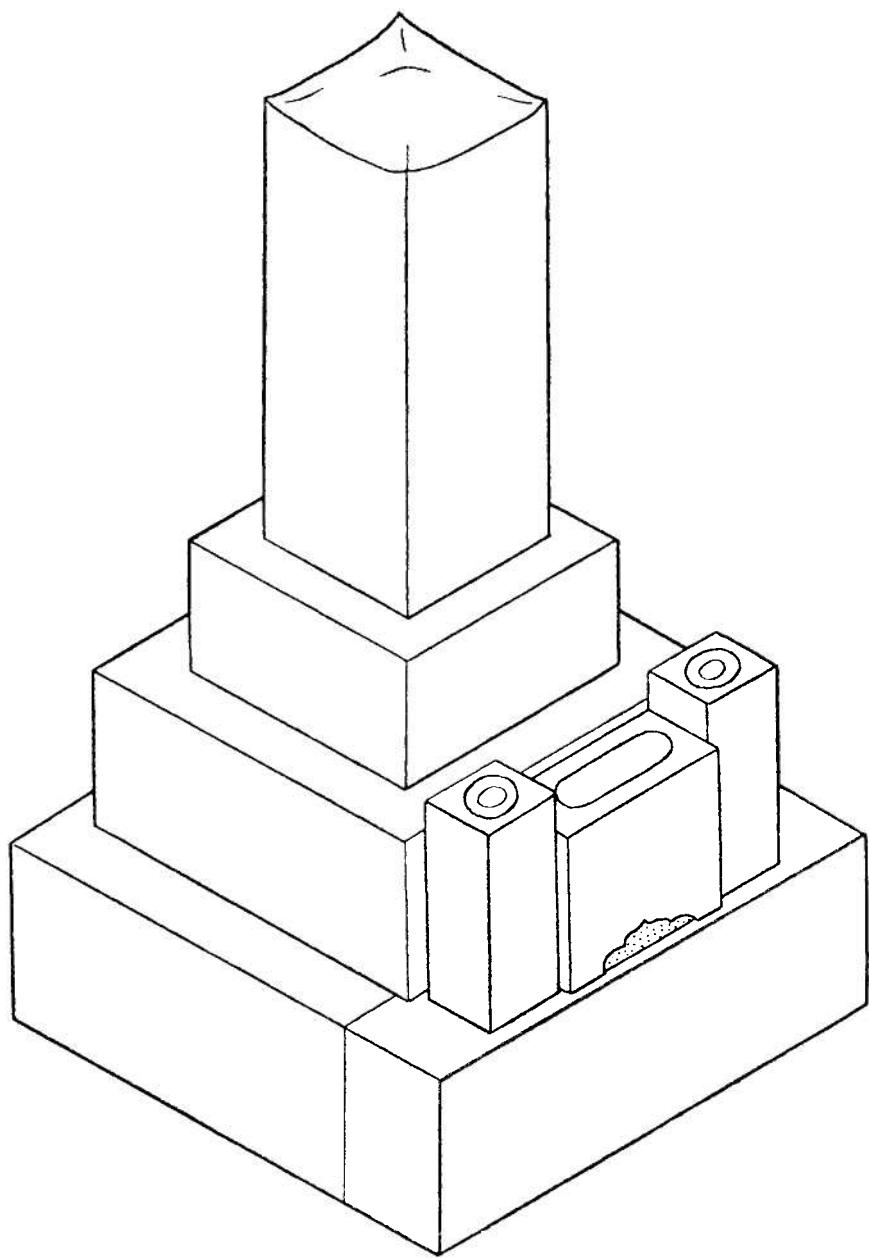


台石目安寸法

	竿	レンゲ	上台	中台	四ツ組
8寸角	尺 0.8~ 2.0	1.2~ 0.6	1.3~ 0.7	1.8~ 0.8	2.5~ 5/8
9寸角	0.9~ 2.3	1.4~ 0.7	1.5~ 0.8	2.1~ 1.0	2.8~ 5/9
1尺角	1.0~ 2.5	1.5~ 0.75	1.6~ 0.8	2.2~ 1.0	3.0~ 6/10

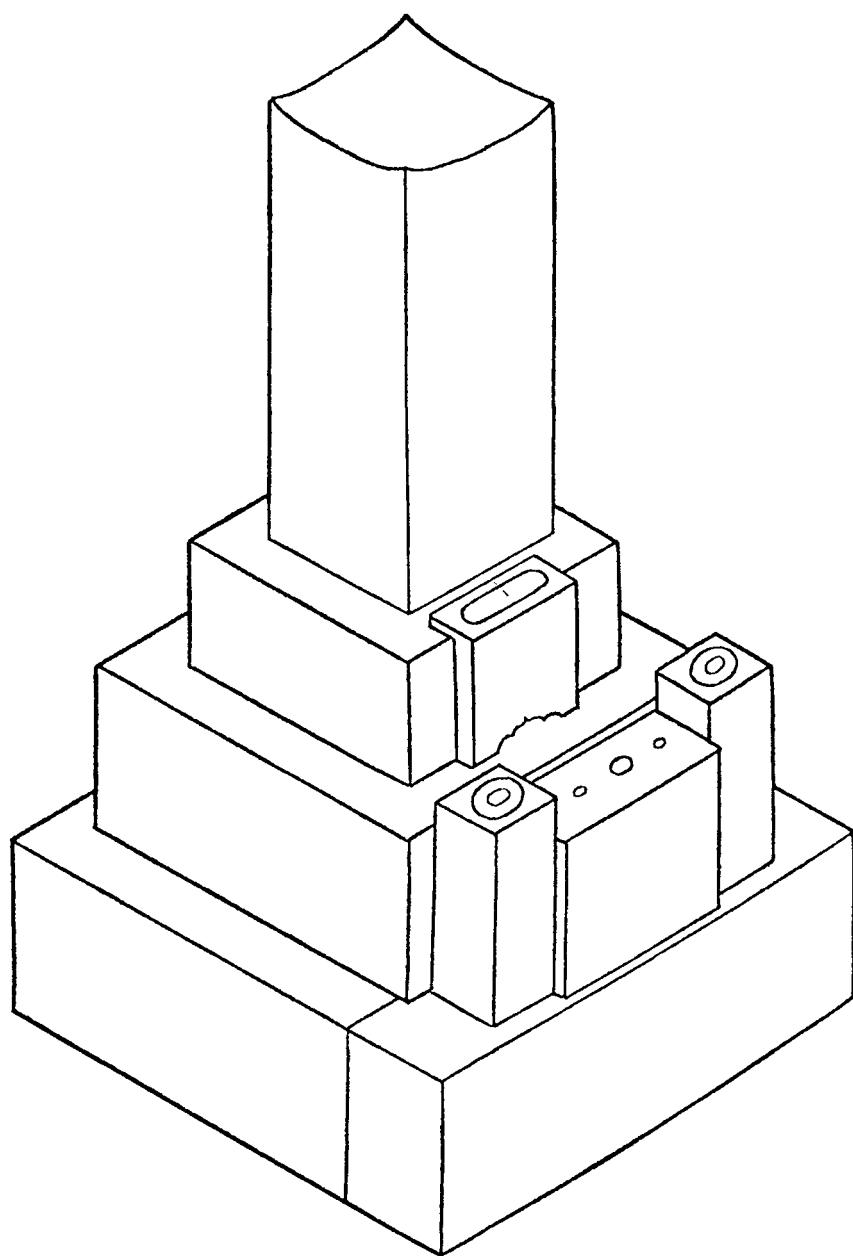
※ 前飾り付属品は台石の高さ大きさにより勘案する。





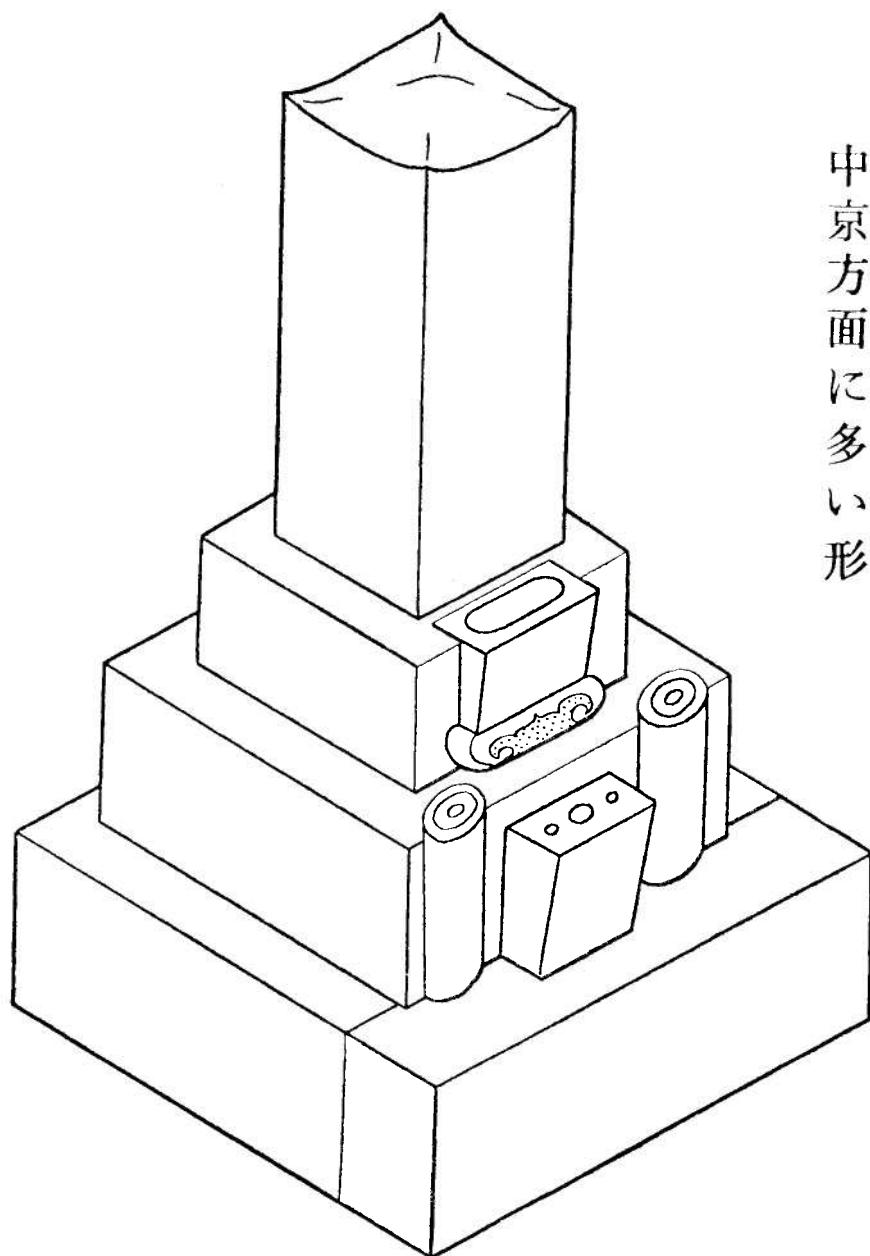
三段積石碑目安寸法

	竿 石	上 台	中 台	四 ツ 組 石	花 筒 水 鉢
8 寸角三段	尺 尺 尺 0.8×0.8×2.0	尺 尺 尺 1.2×1.2×0.6	尺 尺 尺 1.7×1.7×0.8	尺 尺 尺 2.3×2.3×0.5/0.8	尺 尺 尺 1.5×0.45×0.9
9 寸角〃	0.9×0.9×2.3	1.4×1.4×0.7	2.0×2.0×0.9	2.7×2.8×0.5/0.9	1.5×0.45×0.95
尺 角〃	1.0×1.0×2.5	1.5×1.5×0.8	2.1×2.1×1.0	2.8×2.9×0.6/1.0	1.6×0.45×1.05



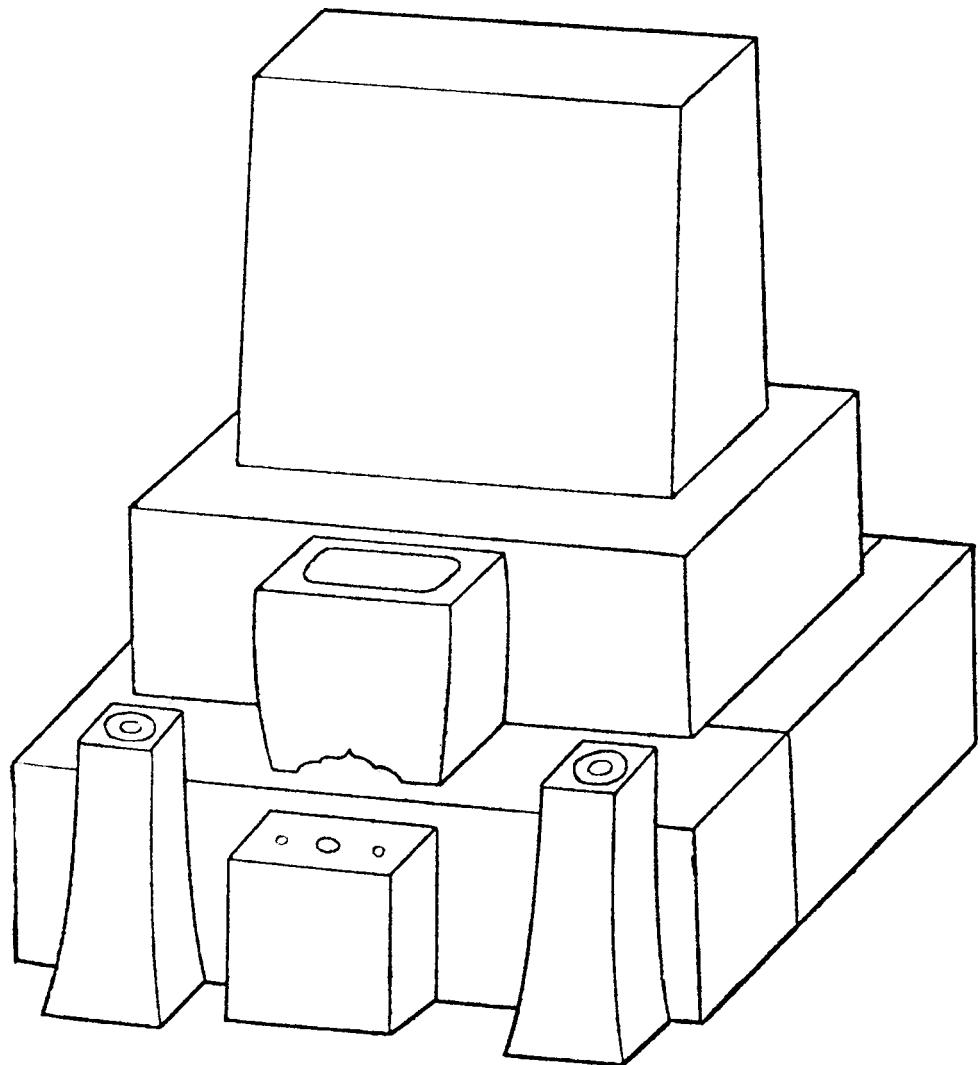
※ 水鉢付上台、水鉢の天場が浮出しになつてゐるが、予算の
面で出ぬ場合がある。

中京方面に多い形



※ 上台、水鉢付中台花筒付一石より切出し作り

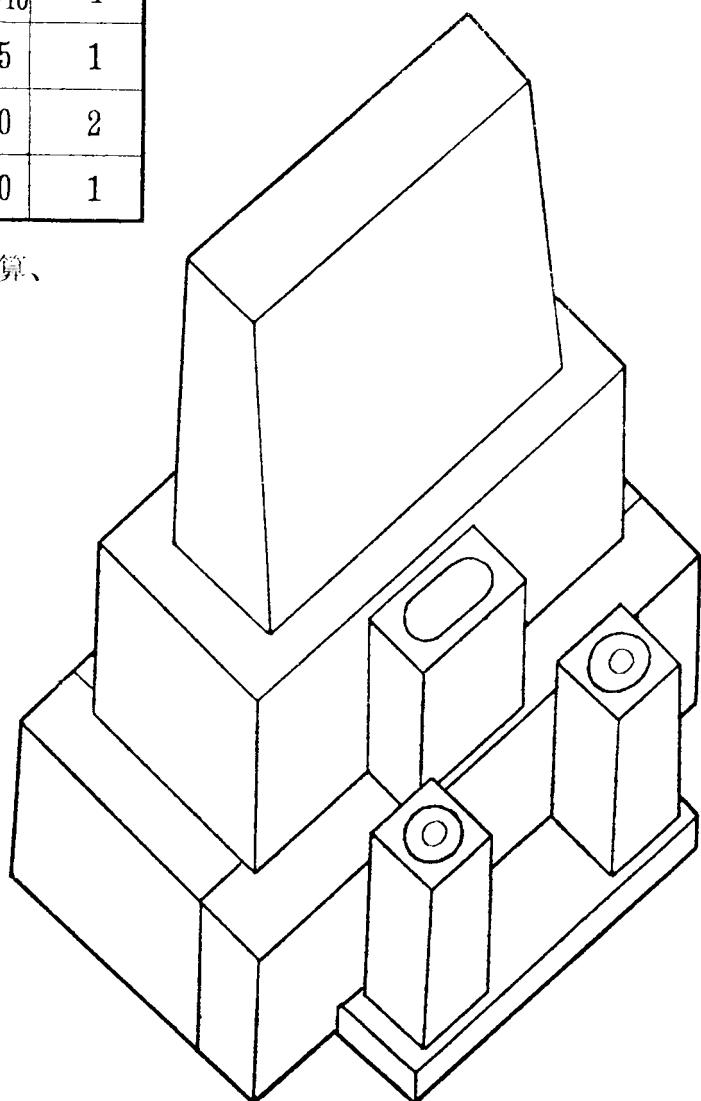
横形石碑 $\frac{1}{10}$ 見取姿図



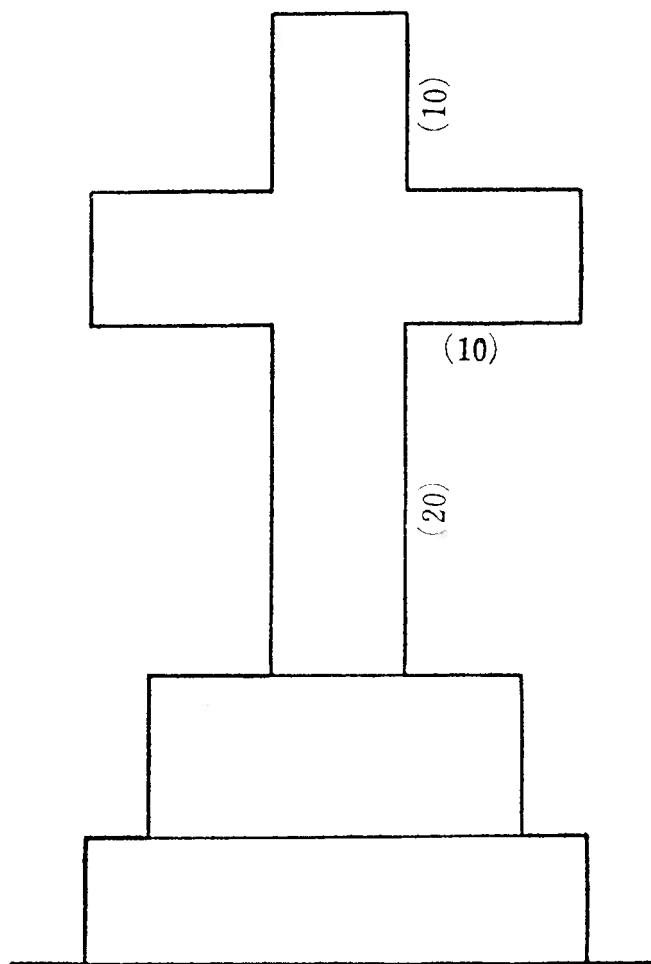
横形石碑適當寸法

	前巾	奥行	高	数
碑	2.00	上 0.50 下 0.70	1.60	1
上台	2.50	1.20	0.8~0.9	1
四ツ組	3.10	1.90	6/8~ 6/10	4
水鉢	0.80	0.40	0.75	1
花筒	0.40	0.40	1.00	2
拵石	1.80	0.60	0.20	1

※ 上記は目安寸法にて予算、
好みで勘案する。



十字架碑の寸法割出し表



※ 石の巾、厚みは字の都合もあって適当でよい。

※ この比率は地元キリスト教会の指示による。



四 方 仏 大 意

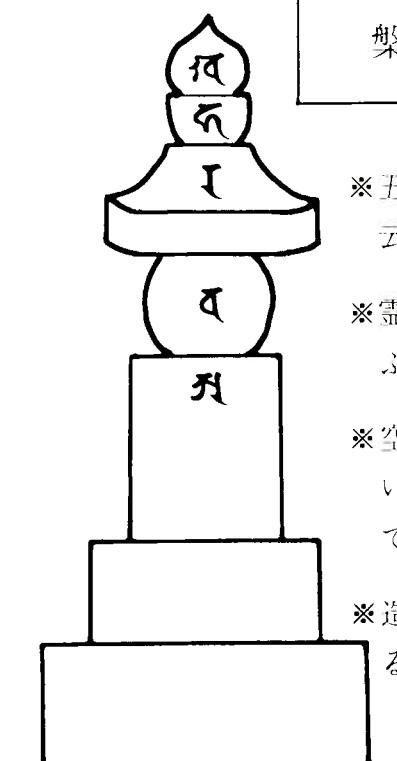
※顕教界四仏 人間生活において一番身近かな、諸願を得四十八の誓願がかなえられると云ふ。

※金剛界四仏 無動、無怒と云い、引退して静かの中に諸種の悪魔外道を破り息災を司ると云ふ。

※胎藏界四仏 赤ん坊が母親の胎内で世の風に当らずすくすくと発育するような護りである。

※四方仏の大意は上記の如しであるが、それぞれの四仏が化身となって、金剛界胎藏界に入れかわると云ふ。

北右	西裏	南左	東前	五輪塔梵字
				空 風 火 水 地
涅槃	菩提	修行	發心	



※五輪塔は日本で出来た独特の四方同形の石造の塔と云われる。

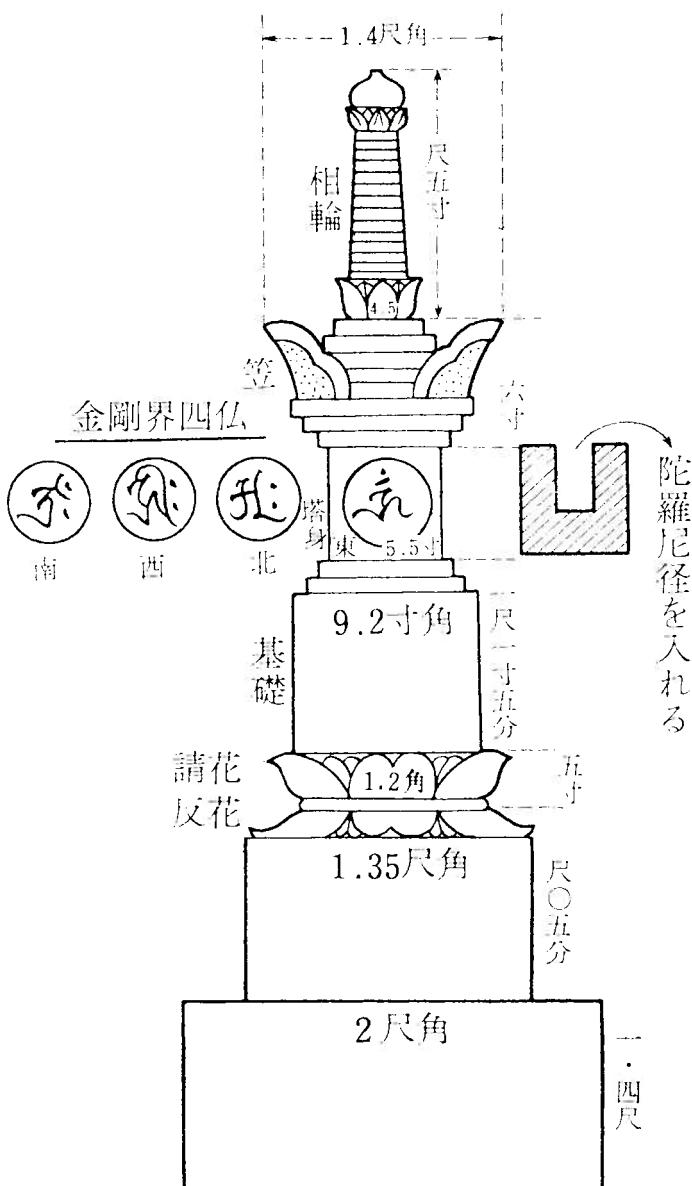
※靈魂を解脱して成仏する立体的な形の上にあると云ふ、五解脱輪塔（略して五輪塔）。

※空、風、火、水、地の五大元素を五と称し輪はいろいろの徳をそなえ丸い輪を広く大きく天地をめぐつてのこすところの意。

※造塔の趣意から申せば塔の四方に彌るのが本来であるが、当今は予算上前のみが多い。

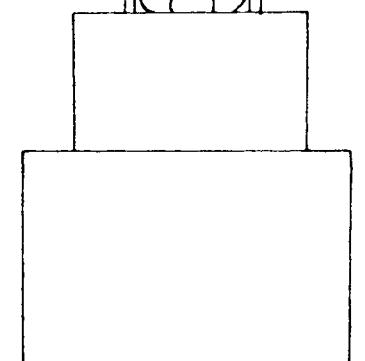
宝 篰 印 塔

- ※ 相輪、笠、塔身、基礎の四部から成りたつ。
- ※ 石の塔は鎌倉時代からと云われる。
- ※ 台石に請花や反花をつけるようになったのはその後からと云う。
- ※ 角飾りは最古のものは直立し、年代とともに外に傾く度合が多い。
- ※ 此の図は現代式にある。
- ※ 寸法は6.7尺にしてあるから大きいものは、横、高さの比率を出して拡大すること。
- ※ 請花、反花台は予算によって二重花もある。
- ※ 前飾りは適当に作る。





観音(女子)



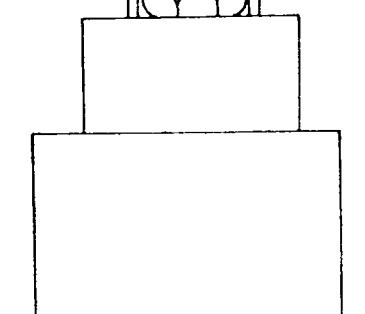
	前巾	奥行	高
竿	0.6	0.6	1.5
上 台	1.0	1.0	0.6
下 台	1.4	1.4	0.9

※ 竿石は前に仏を刻す為奥行を
1.5寸狭めてそれ丈彫刻の肉
の厚みとする。

※ この寸法は最低の寸法故施主
の意向によって7寸、8寸と
大きく作る。



地蔵(男子)



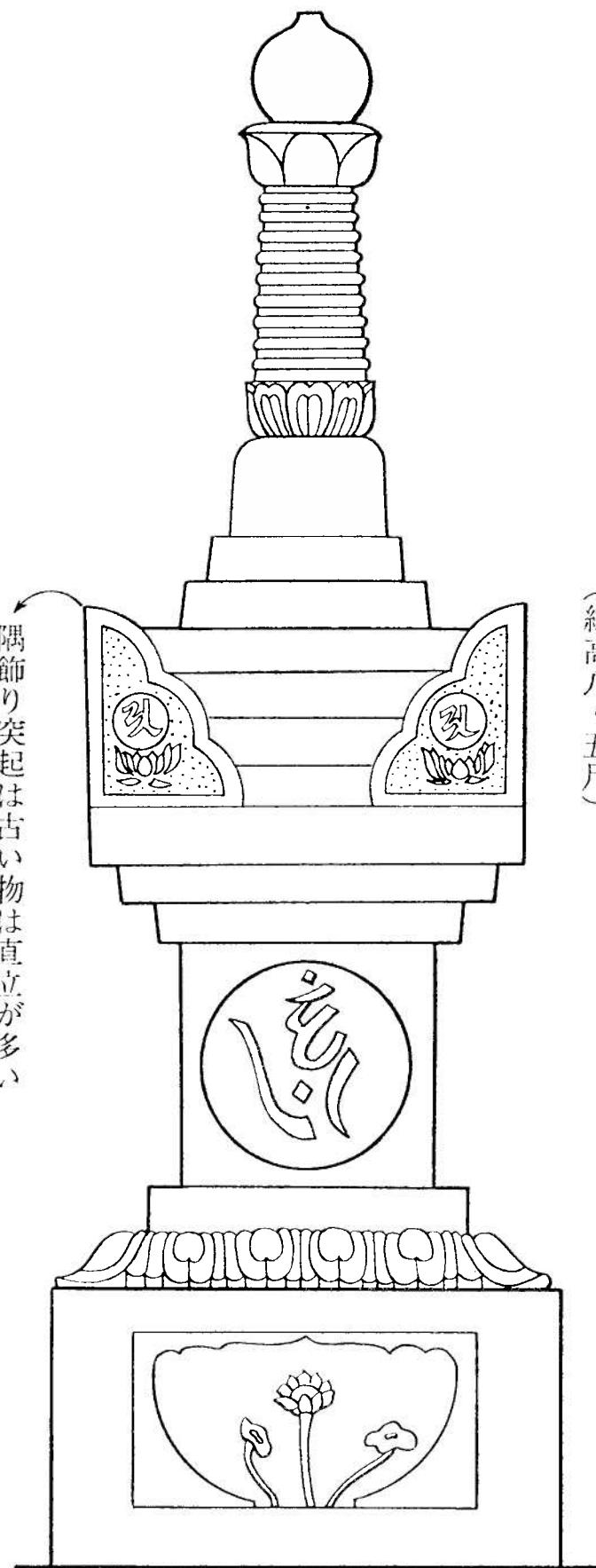
	前巾	奥行	高
竿	0.6	0.6	1.5
上 台	1.0	1.0	0.6
下 台	1.4	1.4	0.7

※ 墓相石碑は関東、関西方面にて、それぞれ説があって決定的なことは依頼者と相談の上にて製作した方が無難である。

鎌倉時代 清滝徳源院 宝篋印塔

(総高八・五尺)

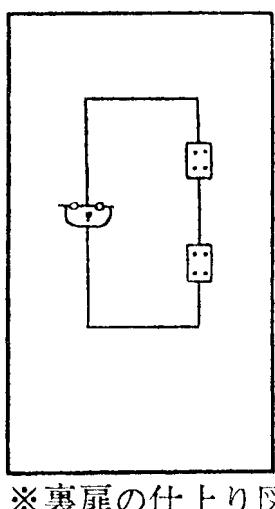
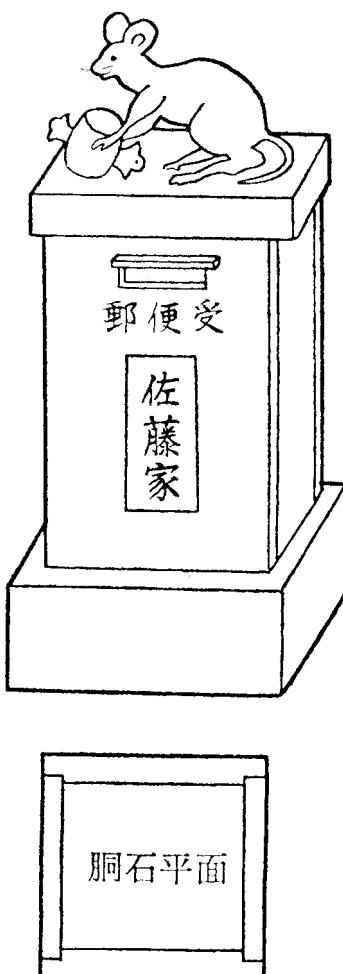
(総高八・五尺)



隅飾り突起は古い物は直立が多い

表札を兼ねた郵便受（昭和四十七年の年）

※ 飾り置物は年々たに新十二支を替えるもよし予算に応じて固定もよい。



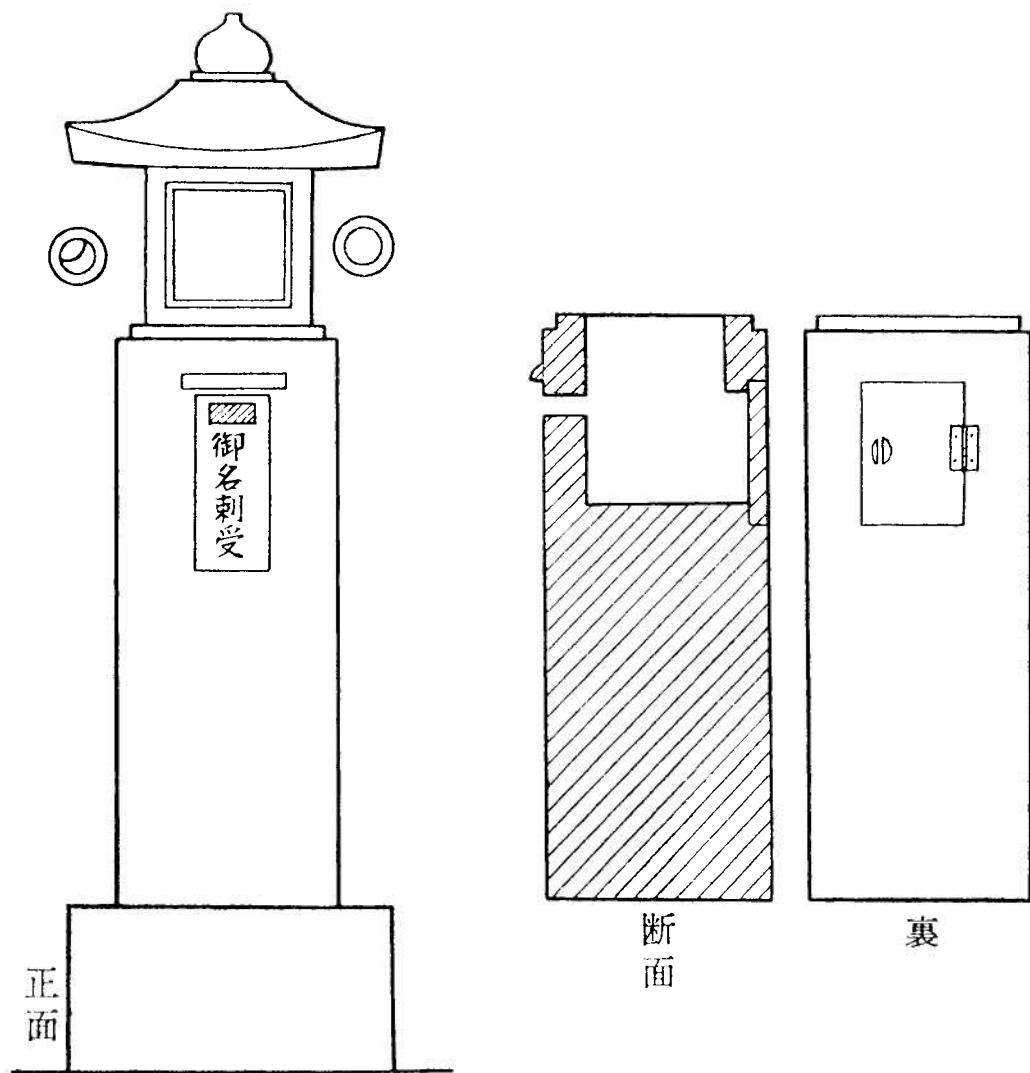
※裏扉の仕上り図

※ 加工も切削機時代になり板石が安易に入手出来るようになつたので、上記玄関の飾りを考案してみた。

※ 裏の扉も石で作り、丁つがいは金物を使用して強力接着剤を使用して石に接着してある。

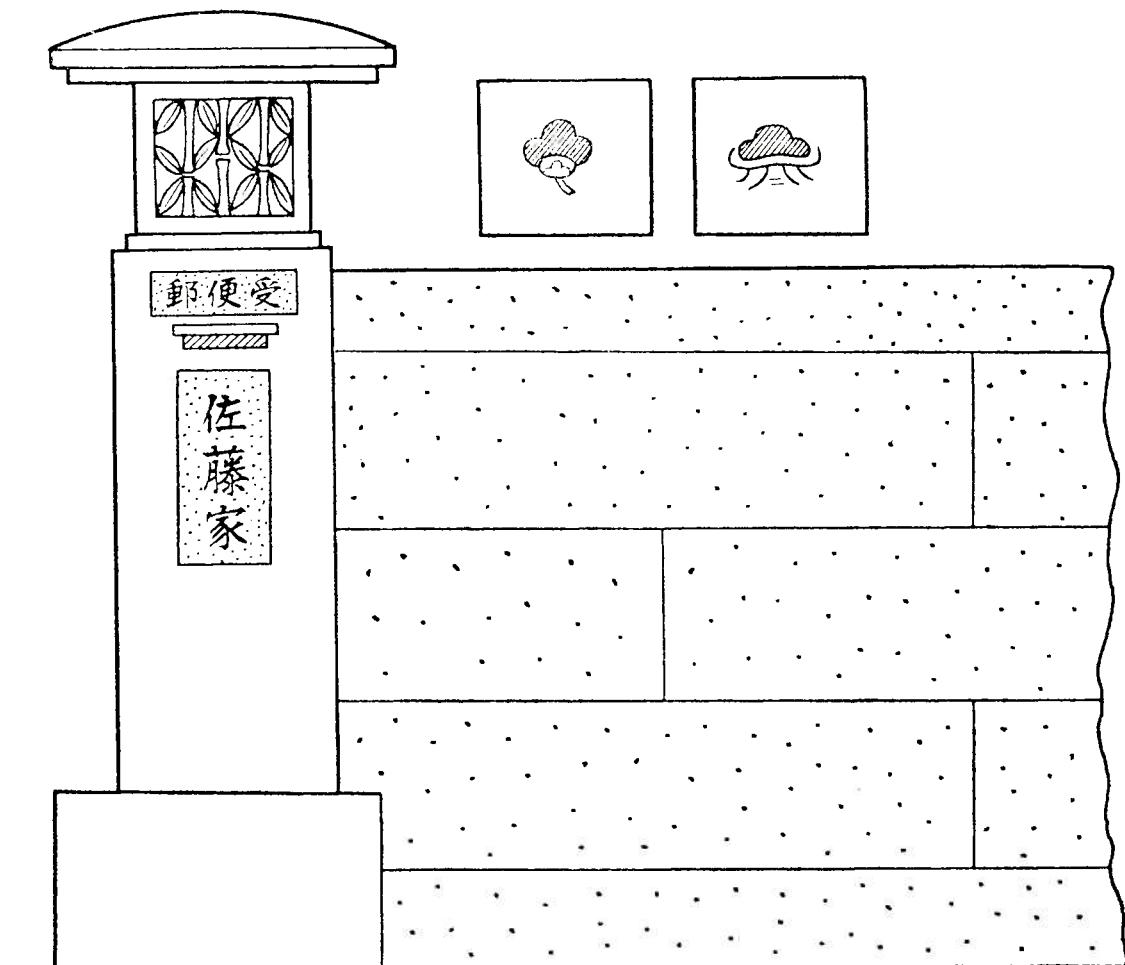
※ 高さは恰好よく現場に適応する。

墓前灯籠兼御名刺受



※ 竪石は一石にしてある。扉や雨覆は切削のコワ
石を利用して接着すればよい。

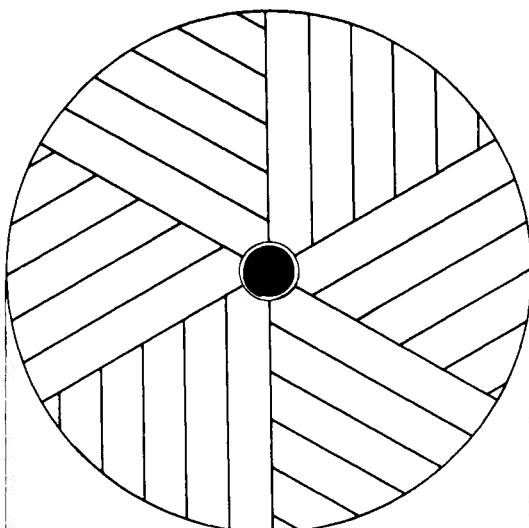
門柱兼郵便受



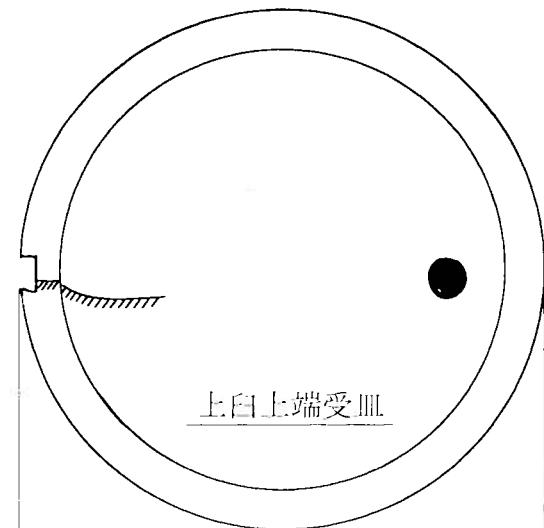
※ 表札、門柱、郵便受となる、火袋の意匠は依頼主の希望にて
家紋等も面白いと思う。

※ 竦石を張石で仕組と内部が広くなり年賀状の配達の時など非
常に利便を得ている。

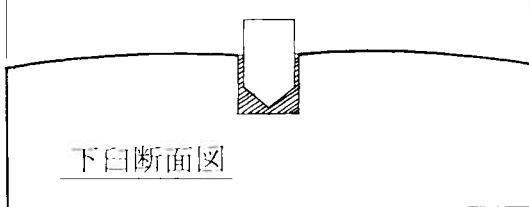
挽白製作図



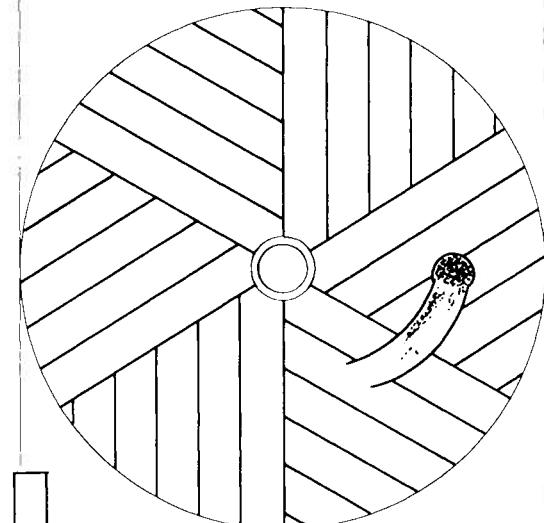
下臼上端目立図



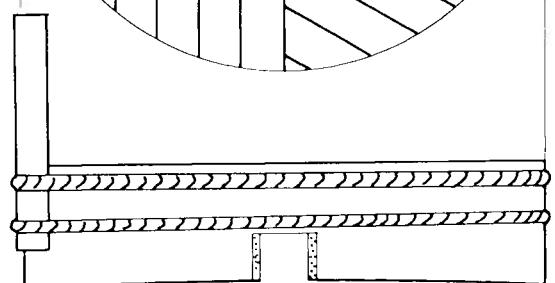
上臼上端受皿



下臼断面図



上臼下端目立図



上臼断面図

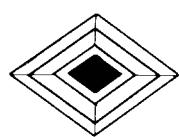
挽白製作図

- ※ 径の寸法 8寸丸～1尺位
- ※ 径の大きい方が製粉能力はあるが長時間の手動のこと男向1尺、女向8寸位が適當寸法か………
- ※ 溝の彫り込 2分～1分位
- ※ この図は六ッ割であるが1尺径の場合八ッ割
- ※ 竹のタガは桶屋に依頼
- ※ 出来上ったら一度試し摺りをしてみる
- ※ 厚みは3寸～4寸位迄
- ※ 一応の参考目安で余は各自勘案する
- ※ 参考として古遺品は別紙の如し

吸江寺 石茶臼 南北朝時代前期貞和五年（一三四九年）

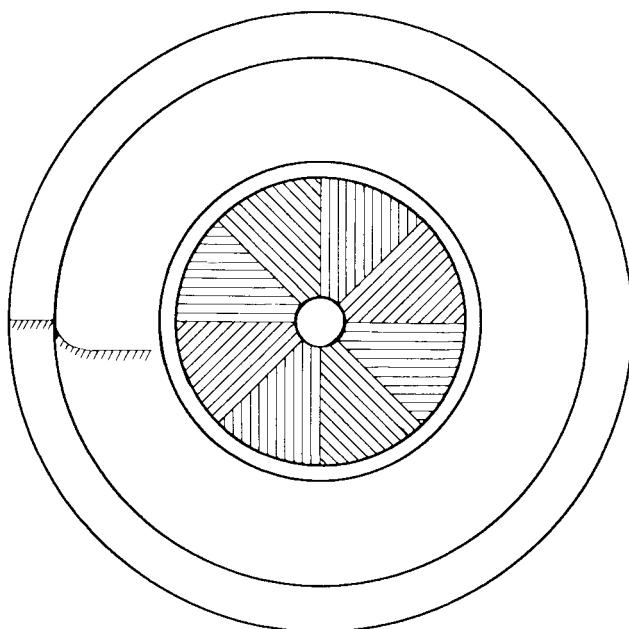
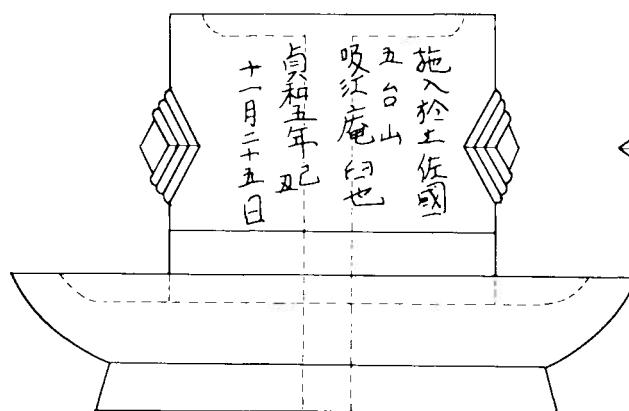
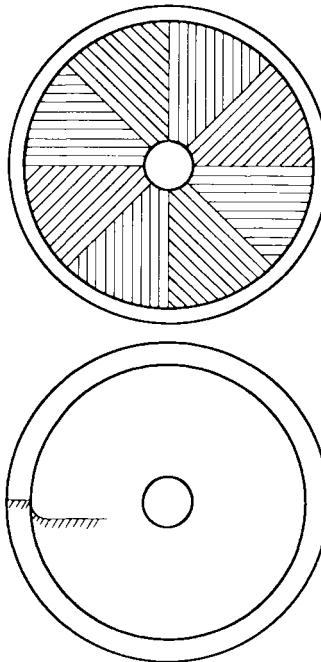
2/10 図

※高知市五台山吸口



※把手口の装飾重ね菱型

上白下部
上白上部



下白平面上部

※上白全体と下白上部かって漆塗りであったので各所に漆の附着のあとがある。

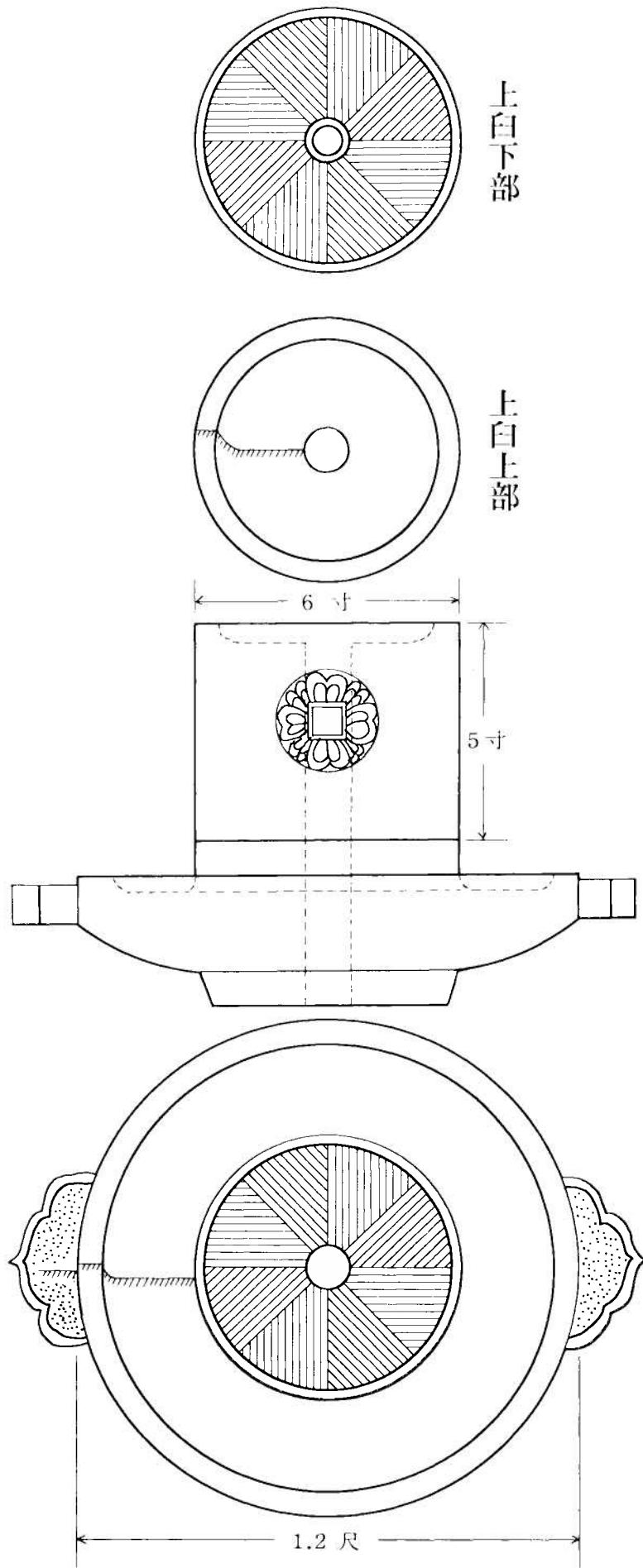
※上台刻銘の二十五日の日すれすれ迄に石が摺り減っている長年使用したのである

※夢窓国師（天竜寺開山）土佐に下りし折、草庵をかまえしどころ

承応元年（一六五二）土佐藩主山内一豊の義子湘南復興し吸江寺と改称せり

室生寺 石茶白 $\frac{2}{10}$ 図 南北時代前期

※奈良県宇陀郡室生寺村室生



※目割 八区 溝筋九條

※上白把手口の方形の穴の周囲複弁の蓮華刻出し肉の出五分

※把手口蓮華刻出の技法福井市一乗谷朝倉遺跡よりの出土品もある。

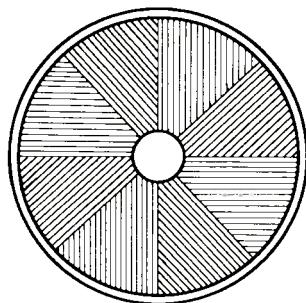
仏隆寺 石茶臼

仏隆寺 石茶臼

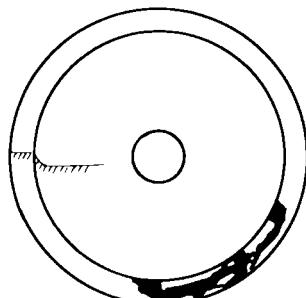
※空海が入唐の折持帰った石茶臼 2/10図
※奈良県橿原郡橿原町赤埴

※黒印の処金にて修理してある

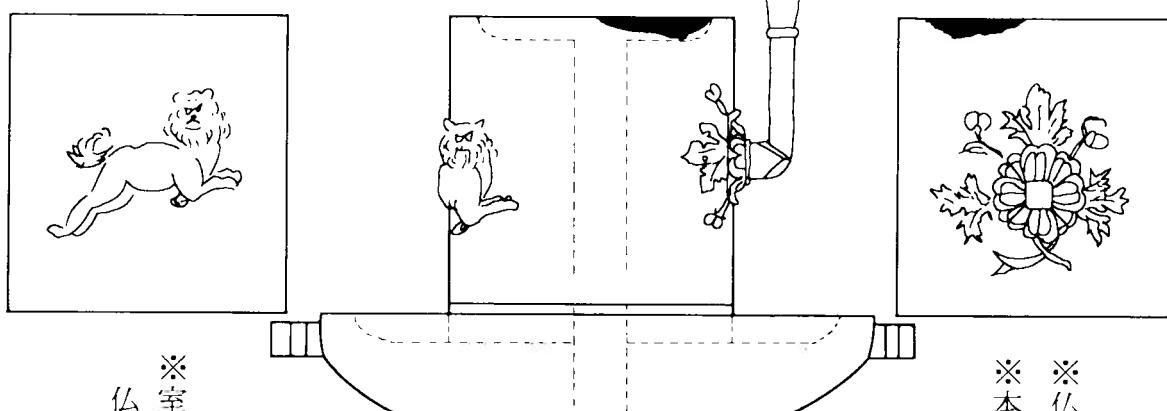
上臼下部



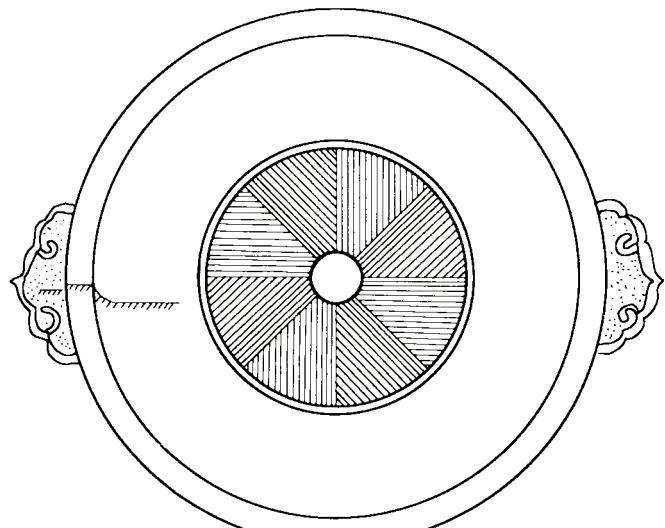
上臼上部



※仏隆寺開山 堅恵大徳（空海の高弟）
※本堂裏に重文の石室が開山の靈廟



下臼平面上部



※室生寺茶臼拝観の砌り、室生寺の祖型は
仏隆寺とのことにて後日拝観したのがこの図である。
※上臼の縁の破損個所純金で接着修理してあるので俗に金の茶臼と称す。

※空海 入唐 延暦二十三年(八〇四年)
翌年十月帰朝の節持參の臼千二百年前
既に目割は八区が一般化している。
※把手口の飾り技法複弁に二枝の牡丹の刻出
その反対面は見返りの走り獅子。
※上臼の縁の破損個所純金で接着修理してあるので俗に金の茶臼と称す。

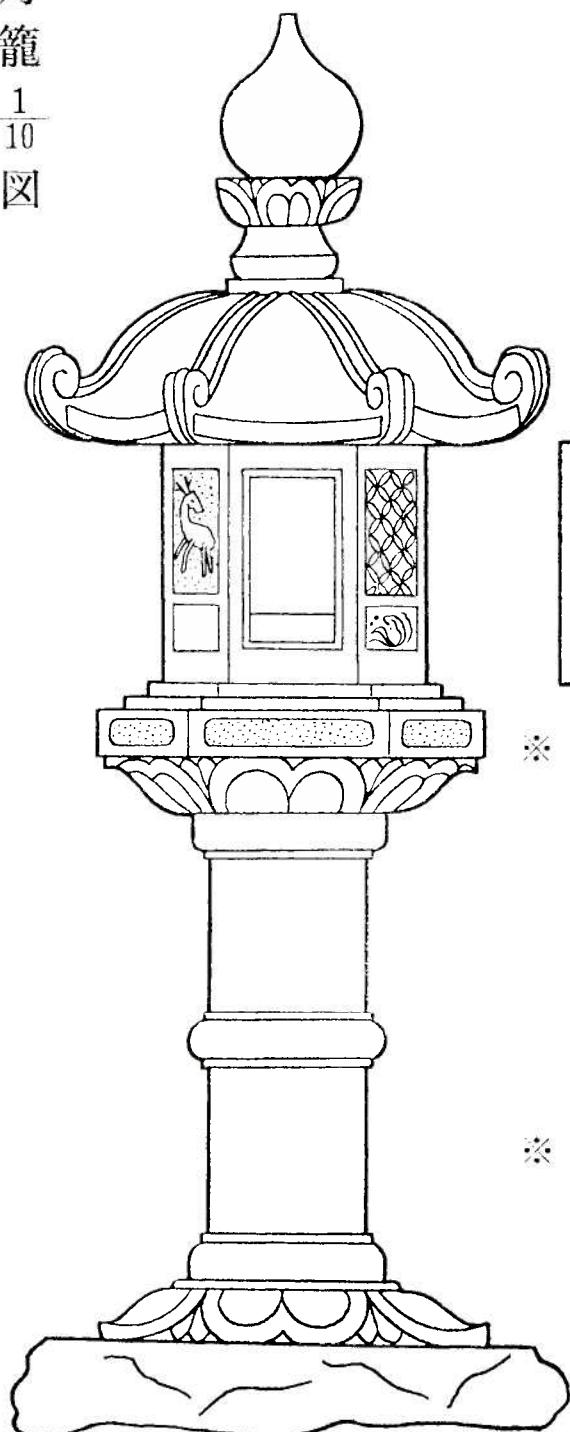
灯 篓

吾が國の石灯籠は奈良時代からはじまつて、平安、鎌倉時代にと、各種の名品が今日迄遺つてゐるのであって、灯籠製作に励むものは、その一つ一つを克明に模作してみるのが理想であつて、恰も書道に励むものが、幾多の古法帖を臨摹することなく、古代の名作を幾多模作し、味はつて自己流の開拓と、発見をすべきである。

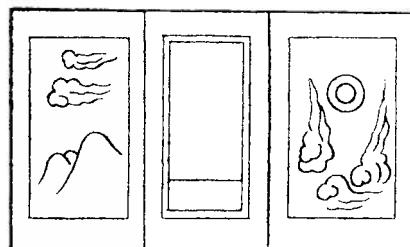
然し現実の問題として、一本の灯籠を克明に模作することは、それだけの觀察力と技術力に、経済的な裏付けとが要求され、不可能に近いものになつて了い、施主の要求もつい安易な道を辿り、転化、退化した作品となつてきただのであるが、このことを、自覺した少數の人達もあつて、千年に残るであろう石造物の製作に励む人もあるのであつて、石造工芸技術の發達の上に縁の下の力持的な存在こそ尊重すべきである。

さり乍ら実用的に要求されるものは現在流布されている春日形や雪見形であつて、これを産業的に生産することは時代の要求でもあるので、一般普遍的なものから古代名作と云われるものを數種参考に掲げてみた。

春
日
灯
籠
 $\frac{1}{10}$
図



基本寸法割出表		
	径	高
玉	13%	20%
傘	40%	13%
火	20%	19%
受	30%	10%
柱	16%	36%
地	30%	5%

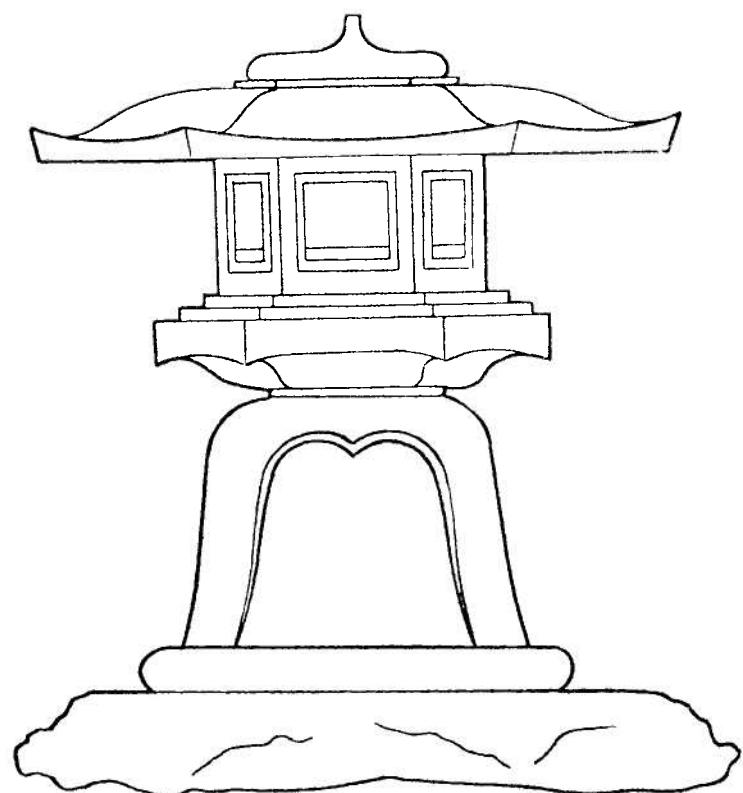


※ 立姿の灯籠類はおおむね上記の比率が中心となっている。古代の古い灯籠類は若干傘が、小さく受が大きい比率となっているが、一つの目安として上記の比率を記憶するとよい。

※ 春日 1 本の総量を出すときは、傘 1 ケ分の約 3.4 倍弱であるから傘 1 ケ分の寸法比率をよく記憶しておくと早出しが出来る。

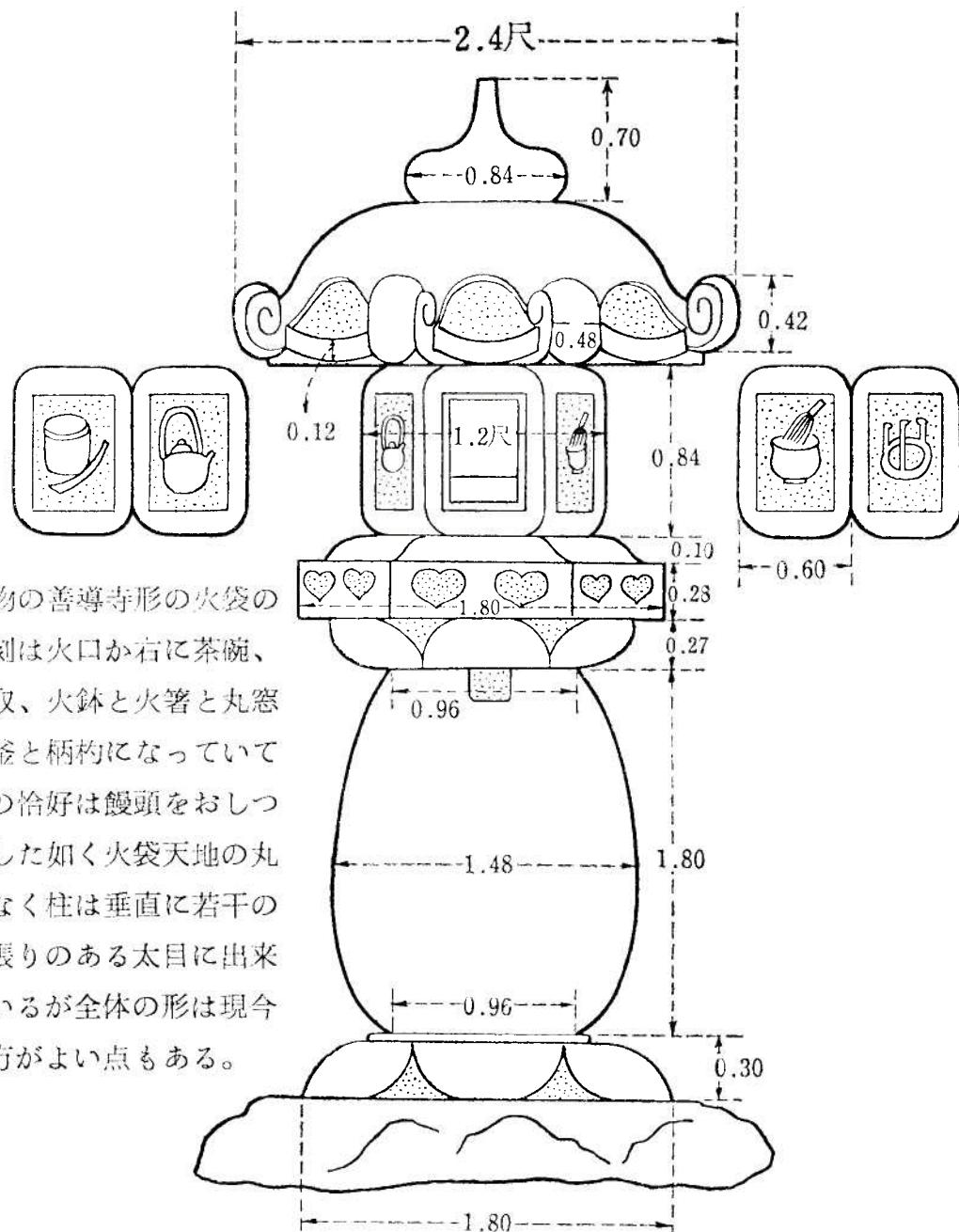
基本寸法割出し表		
	径	高さ
傘	六角の耳～耳	20%
火	40%	20%
受	60%	15%
足	50%	40%

※ 左記の比率は傘の六角の剣先より剣先迄の寸法を基本として各比率を出す。



六角雪見 $\frac{1}{10}$ 図

善導寺形 6 尺寸法図



※ 実物の善導寺形の火袋の彫刻は火口か右に茶碗、炭取、火鉢と火箸と丸窓茶釜と柄杓になっていて玉の恰好は饅頭をおしつぶした如く火袋天地の丸面なく柱は垂直に若干の胴張りのある太目に出来ているが全体の形は現今の方がよい点もある。

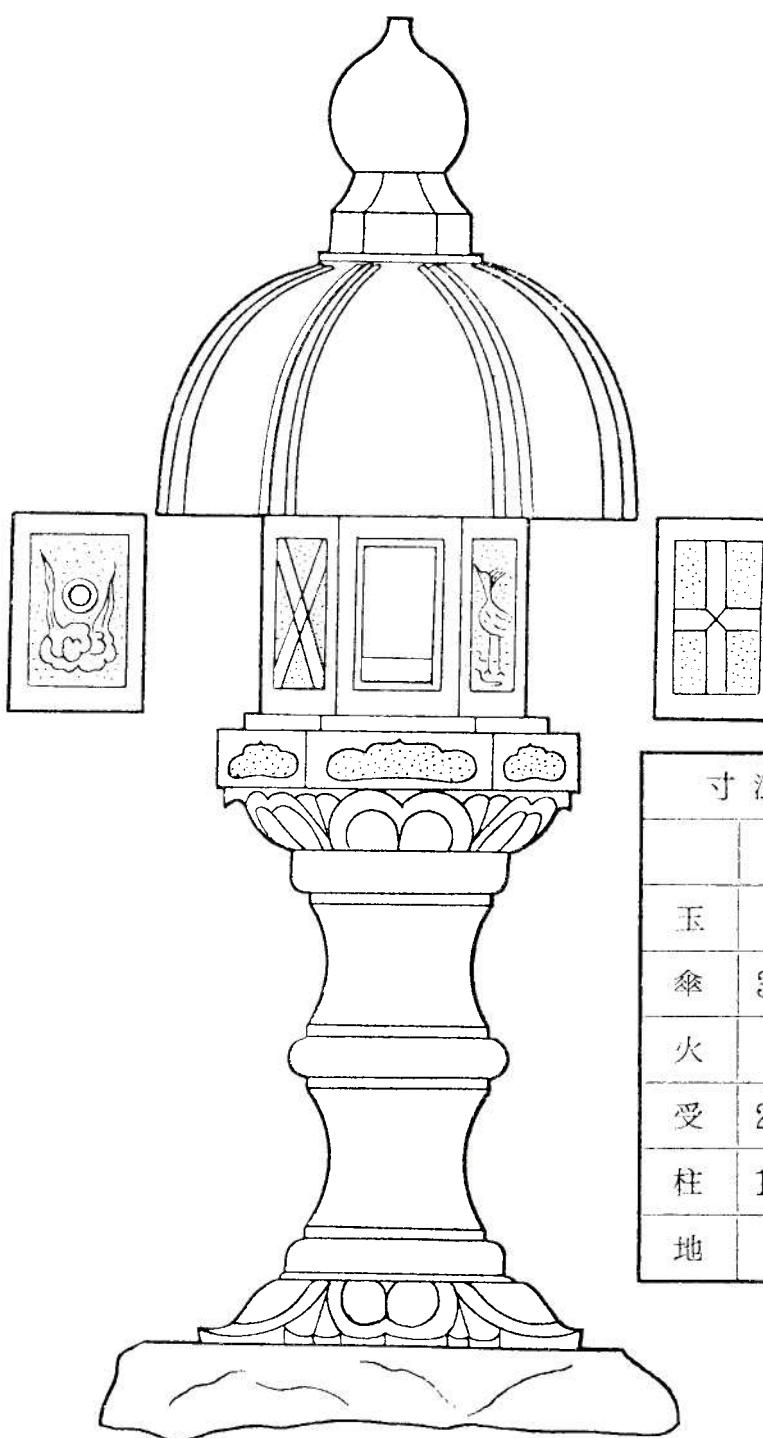
※ この形は比率表にある如く高さが若干低い。

※ 奉石の径40%にしてあるが若干少い方が恰好がよい。

※ 細部の寸法は製作者それぞれの嗜好による。

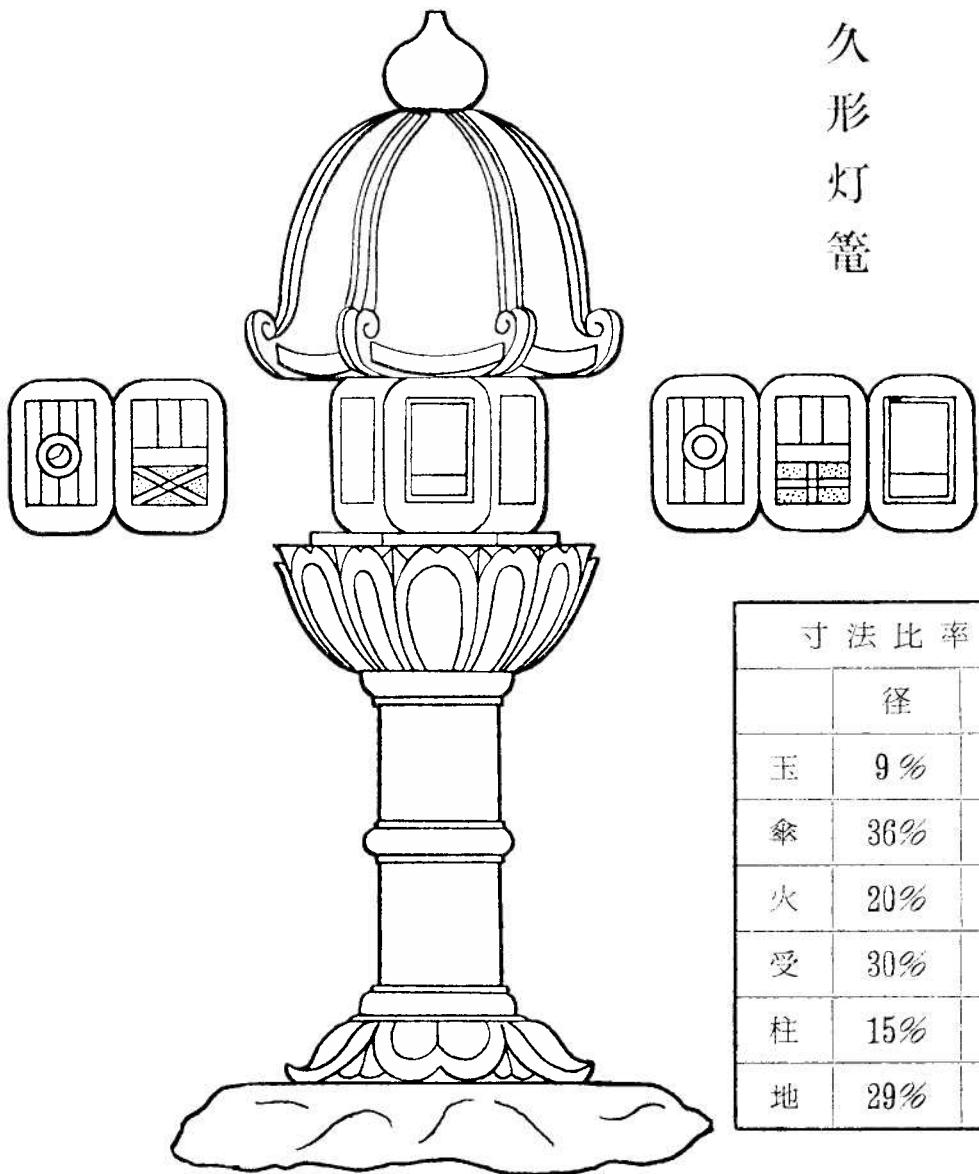
	径	高
玉	14%	12%
奉	40%	15%
火	20%	14%
受	30%	10%
柱	25%	30%
地	30%	10%

濡鷺形
 $\frac{1}{10}$
図



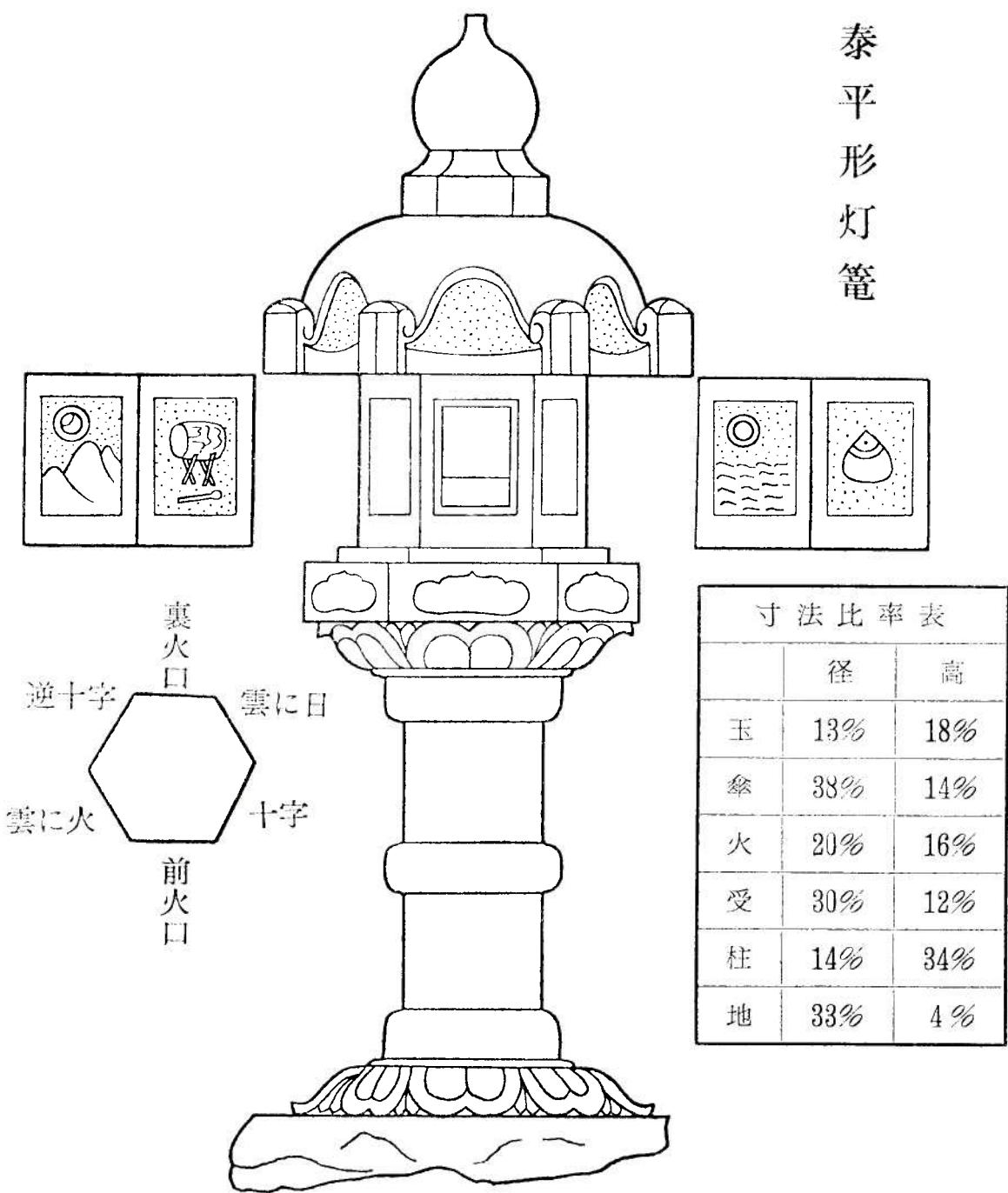
寸法比率表		
	径	高
玉	12%	17%
傘	36.5%	20%
火	20%	15%
受	27.5%	10.5%
柱	16.5%	33%
地	30%	5%

利久形灯笼



寸法比率表		
	径	高
玉	9%	10%
傘	36%	24%
火	20%	15%
受	30%	12%
柱	15%	32%
地	29%	5%

泰平形灯笼



※ 火、側面の意匠は従来のものは上記の如くであつてなにから転

化したかは判明出来ぬが余りにも安易に走りすぎの感あり、且

又泰平形の名称にそぐわぬものあり、上図の如くにしてみた。

※ 現今の月、日の彫り物は古代灯笼の丸窓からの転化と想うがあ

かり取り本意の時代と違つて、これはこれでよいと想うが前火

口側に日輪（表）裏火口側月（裏）が妥当だと思案する。